

子どもたちに考古学の楽しさを！ ～出前授業の実践より～

野 代 恵 子

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1 はじめに | (2) 見て触って考えることの大切さ |
| 2 出前授業の実績と傾向 | (3) 子どもの好奇心を活かしたアプローチ |
| 3 出前授業により何を伝えられるのか | 4 おわりに |
| (1) 実践内容 | |

1 はじめに

山梨県埋蔵文化財センターは、昭和57年に開所し、平成24年に設立30周年を迎えたところである。山梨県内での発掘調査件数は、市町村での調査も含めると例えば平成24年度では約340件にのぼる。このように毎年多くの埋蔵文化財の調査が行なわれ、これまでに蓄積された出土品は膨大な数に及ぶ。当センターで調査した遺跡の出土品のうちの一部は、考古博物館に展示され広く一般に公開されるが、その多くは収蔵庫に眠っている。そんな出土品を活用するため平成12年より当センターに資料普及課1課2担当が設置され、考古資料を活用した普及活動を本格的に開始し現在に至っている。このような流れの中で、貸出しキットの整備や各種パンフレットを刊行し、出土品の活用を促してきた経緯がある。また、まず学校の先生方に埋蔵文化財やその活用方法について知ってもらうため、先生を対象とした埋蔵文化財活用支援講座を開催したり、職員が学校等に赴いて授業作りのお手伝いをする出前授業も合わせて行なってきた。この他、近年では、広く一般の方々を対象とした普及イベントを開催し、幅広い年齢層の方々に考古学の楽しさを伝える活動を積極的に行なっている。

本論では当センターでの資料普及活動のうち、出前授業の実績を中心に、子どもたちに向けての埋蔵文化財のよりよいアピール方法について考えてみたい。

2 出前授業の実績と傾向

当センターが出前授業で行なっている主なメニューとしては、土器成形・土器焼き、火起こし体験、勾玉作り、土器・石器に触る体験などがある。このうち、人気なのが土器成形・土器焼きと火起こし体験で、合わせて全体の80%強を占める(表2)。出前授業の形態としては、土器焼きの際に火起こし体験を実施するケースが多いため、火起こしの単独授業と合わせた結果、火起こし体験がトップとなっている。なお、ここで表わす数字については平成20～25年度の6ヶ年で実施したものについてである。

次に出前支援授業の対象であるが、小学校からの要請が多く、全体の約80%を占めている(表1)。支援学級・児童を含めた学年別でみると、小学校では6学年が圧倒的に多く、中学校では1学年が63%を占め、3学年は1件のみである。高等学校については、講義形式での要請はあるが、体験を伴った出前授業のケースは今のところない。この結果から見えるのは、歴史を初めて学ぶ6学年への興味付けとして出前授業が要請されるケースが多いということである。中学生についても、より本格的に歴史を学ぶ段階での興味付けとして使われているものと考えられる。これは、次にみる出前授業の要請時期にもよく表われている。6月を筆頭として、4月～7月までで全体の65%を占めているが、これもやはり歴史の学習を始める時期と重なっている。特に学校側からは、縄文時代・弥生時代に関わる部分で出前授業を組みたいという声が高い。6・7月に比べて5月の比率が低いのは、当センターの周辺市町村においては6学年の修学旅行が5月に組まれているケースが多い事が影響していると考えられる。この他、夏休み前までの時期に集中している理由としては、運動会などの学校側のイベントが多い秋には敬遠されていることも挙げられる。特に近年、残暑が厳しいため運動会が10月にずれ込む学校が多いこともあってか、10月の要請は少なくなっている。以上のようにこれまでの実績から見える傾向としては、歴史を学習し始めるタイミングで出前授業を取入れたいという学校側の要望が強いことがわかる。

3 出前授業により何を伝えられるのか

当センターでは、過去6年間で4,000人近くの児童生徒に対する出前授業を行なっているが、この多くの子どもたちに何を伝えられたのかを見ていきたい。

(1) 実践内容

A 土器成形・土器焼き

主に縄文土器を製作する。教科書や資料集では火炎土器がお馴染みであるが、県内の発掘調査で出土した土器

を見せながら、土器には地域によって様々な形や文様があることを伝える。山梨県周辺で見られる土器の造形の素晴らしさや、山梨県周辺は当時最も栄えた地域のひとつだったことも併せて伝える。実際の土器と見比べながら製作することにより、土器の特徴を理解し、それを使っていた縄文人の暮らしに思いを馳せる。ほとんどのケースでは、作品の乾燥後に土器焼きを実施している。焼かなくてもよい粘土で実施したケースも1件ある。土器成形～土器焼きを体験すると、粘土の可塑性とそれを上手に利用して生活の道具を作り上げた人々の器用さを実感することができる。土器完成後に、学校サイドで煮炊きの実験をしてみた例もある。土器作りの場合は、体験の成果品を手元に残せるという点で人気が高いと思われる。

B 火起こし体験

体験を通じて、火をコントロールすることが、過去も現在も人間の生活にとってどれほど重要なのかに気付かせる。また現在使っているガスコンロやライター、マッチなど便利な道具がない中、昔の生活では、自然にある材料を使ってどんな風に火を起こしていたのかを伝える。用意している方式は、もみぎり式・まいぎり式・弓ぎり式・ヒモぎり式・火打ち式の5種類であるが、この中から学校側で設定した時間に応じた種類・内容の体験機会を提供している。普段扱うことがほとんどない火を身近な存在として感じると同時に火の怖さも伝える。火と人との歴史のみならず、火そのものについて知るきっかけともなっている。簡素な道具であるが、うまく使うと瞬時に火を起こせるというのは、子どもにとっては非常に魅力的であり、多くの子どもが熱中して取り組む姿が見られる。学校側での事前準備（例えば土器作りでは粘土練り、土器焼きでは薪の用意など）や材料の購入費用（勾玉作りでは石や紙ヤスリの購入が必要）がかからないことなどから、先生方も授業に取り込みやすいようである。

C 土器・石器に触る体験

学校に赴く際には、なるべく本物の出土品を持参し見て触る体験をしてもらえるよう内容の組み立てを心がけている。前述のように土器作りの際にも本物の土器を持参しているが、この場合は土器の選択にあたっては見本にもなり、また真似して作りやすいよう小形でシンプルな形のものをピックアップしている。一方、見せて触らせることを目的とする場合は、子どもが興味をもち易いように、動物モチーフがついたものや、豪華な飾りが付いたものを選択している。山梨県域では、特に縄文土器は華美なものが多く、見ているだけでも楽しくなるような装飾が付けられたものが多い。また動物モチーフ装飾が付いたものも多いので、土器に親近感をもってもらうためには、これらを選んで持参するようにしている。説明の際も、ただ提示して説明するだけでなく「何に見えるかな？」というような問いかけを加えて考えさせるこ

とにより、子どもたちがより主体的に遺物に関われるように心がけている。この他、自分たちが住む地域のそばにも遺跡があることを知ってもらうため、学校周辺の遺跡の出土品を持参することもある。

子どもたちが出土品に関わる機会としては、校外学習などで博物館施設を訪れるという場面もあるが、基本的に博物館では、出土品はケースに入れられた状態で展示されており、ごく間近で見たり触ってみるという体験はできないことが多い。この点、出前授業では、授業内容に沿った出土品や学校近くの遺跡からの出土品を選んで教室に持ち込み、子どもたちに見て触らせるという、ある意味オーダーメイドの特別な体験を届けることが可能である。実際に触った子どもたちの感想としては「ザラザラしている」「土みたい」という触感的なものから「この文様の形なんだろう?」「何でひびが入っている?（接合部分に対する疑問）」「この白い字なに?（出土位置の註記に対する疑問）」という質問系までさまざまなものがある。いずれにしても視覚限定の体験を上回る情報や、好奇心の響き合いが感じられる。

D 勾玉づくり

平成19年に、メニューの選択肢を増やす目的で加えた。導入では勾玉をはじめとするアクセサリーのもつ意味について伝える。実際作るにあたっては、形の意味について考えたり、時代ごとの形の特徴なども併せて伝える。四角い石を削って自分でオリジナルの勾玉を作りあげ、その体験の成果品を手元に残せるという利点がある。また、土器作りでは対応しきれないような大人数対象のケースでもある程度は対応できるメリットもある。

E 講義形式

小学校において、地域の歴史の話など、講義形式での出前授業を要請されるケースもある。その際も、ただ話を聞くだけではなく、参加し体験できるような内容づくりを心がけている。その一例を挙げてみたい。教科書に沿った授業で取り上げられる縄文時代はほんの数時間で過ぎ去ることから、これらの時代はごく短いものと思っている子どもも多い。このため、時代ごとの時間的な尺度を体感してもらうべく、広い教室にメジャーを伸ばした「時代ものさし」で、旧石器時代から現代までの時間の長さを指し示す内容を盛り込んだことがある。子どもたちは、旧石器・縄文時代の長さを目にして一様に驚いていたが、このように実際に時代の長さを比較して「見る」というライトな体験でもその効果は思いの外高いといえる。このため講義形式の授業でもなるべく体感できるような要素を含んだ内容を提供するようにしている。

私たちが、出前授業をすることによって子どもたちに味わってもらいたいのは、究極的に言えば歴史の追体験である。発掘調査によって得られた成果や本物の出土品



土器作りの様子（小学6年生）



土器焼きの様子（小学6年生）



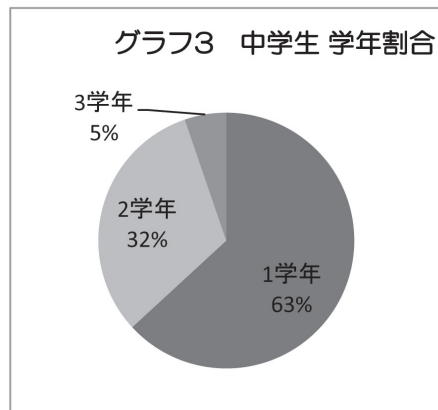
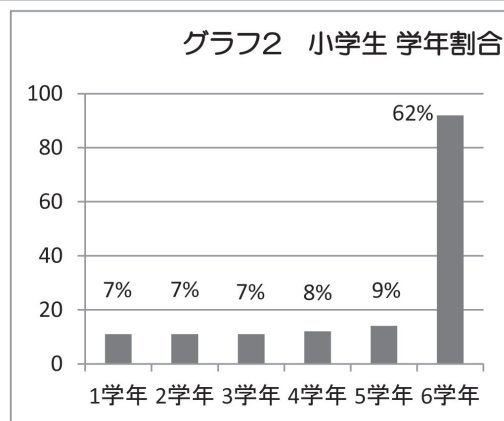
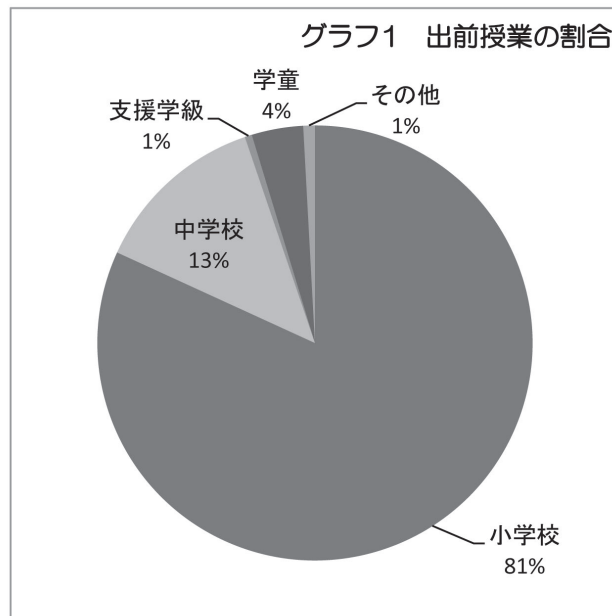
土器を触って見る体験（小学6年生）

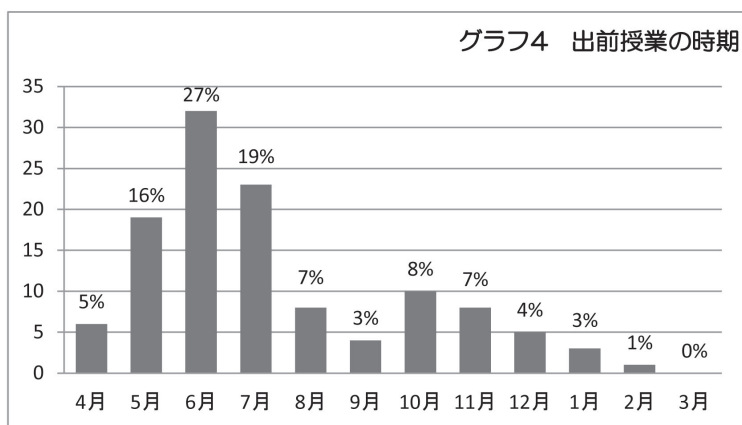


土器を触ってみる体験（小学1～3年生）

対 象	件 数	人 数
小 学 校	89	3229
中 学 校	11	511
支 援 学 級	3	21
学 童	3	151
そ の 他	3	34
合 計	109	3946

表1 出前授業の件数と人数（平成20～25年度）





火起こし体験：もみぎり式（小学6年生）



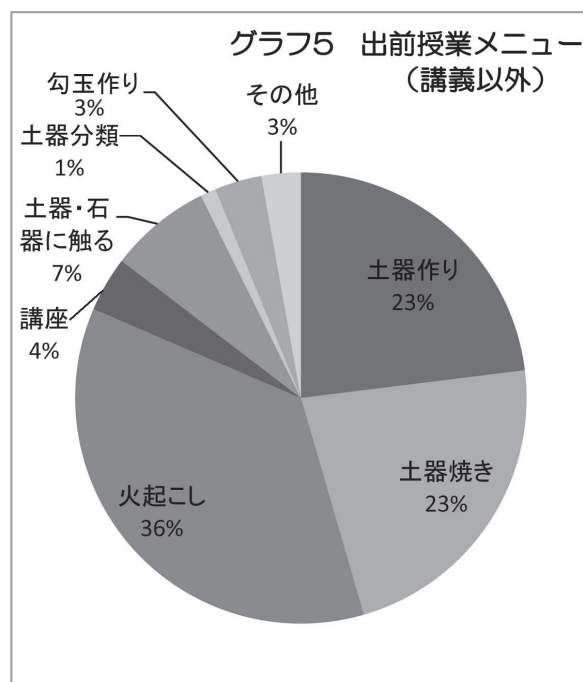
火起こし体験：まいぎり式（中学1年生）

内 容	H20	H21	H22	H23	H24	H25	合計
土器作り	13	9	7	5	4	3	41
土器焼き	12	9	7	5	4	3	40
火起こし	16	12	8	7	13	6	62
講座	1	2	0	1	1	2	7
土器・石器に触ろう	3	3	1	1	0	4	12
土器を分類	0	0	0	0	0	2	2
勾玉作り	0	1	3	1	1	0	6
その他	0	1	0	1	0	4	6
・土鈴作り	0	0	0	1	0	0	1
・石器作り	0	1	0	0	0	0	1
・縄文プラバン作り	0	0	0	0	0	1	1
・土器で古代米を炊く	0	0	0	0	0	1	1
・どんぐり白玉作り	0	0	0	0	0	1	1
・拓本体験	0	0	0	0	0	1	1
合 計	45	38	26	22	23	30	184

表2 出前授業の内容



縄文土器と弥生土器を分類する体験（小学1～3年生）



その他としては、土鈴作り・石器づくり・縄文プラバン作り・土器で古代米を炊く・どんぐり白玉作り・拓本体験が1件づつあり。

にじかに触れ、実際に土器や石器を自分で作ったり、火を起こす体験をすることにより、そこにかつてあった歴史を、人ごととして「知ること」ではなく、身をもって体験し「感じること」が大切なのではないかと考えている。

（２）見て触って考えることの大切さ

当センターでは、出前授業で学校に赴く際には、なるべく本物の出土品を教室に持ち込むようにしている。では、出前授業で教室に持ち込んだ出土品をもっとよく見てもうするためにはどうしたらよいか。ここでは土器の場合を考えてみる。完全な形の土器を見て触る体験から得られる情報は、上述のようにその感触を確かめたり詳細な観察をすることにより、ただ見るだけの視覚的なものよりはるかに多くはなるが、そこから考えをともなう活動に導くことはなかなか難しい。このため今年度、破片資料を活用した体験を実験的行なった。

●土器片の分類体験

ケース１

学童クラブにおいて、小学１～３年生30人程度の集団で実施。内容的には夏期休暇中のイベントとして、火起こし体験・土器で古代米を炊く・出土品モチーフのプラバンストラップ作り・出土品を見て触るという様々な体験のひとつとして加えた。まず完全な形の縄文土器、弥生土器を提示して、その特徴を説明。次に、縄文土器片と弥生土器片が混在する箱を用意し、それらを縄文土器の箱と弥生土器の箱に見分けて入れてもらうというものである。作業し易いよう４～５人程度のグループで実施したが、どのグループでもほぼ確実に分類することができた。

ケース２

学童クラブにおいて、小学校１～３年生50人程度の集団で実施。内容的には夏期休暇中のイベントとして、火起こし体験５種類と出土品を見て触るという内容の中で行なった。ケース１と同様に４～５人程度のグループごとに実施したが、どのグループもほぼ確実に分類することができた。またこのケースでは、装飾的な破片を加えたため、「この文様、波みたい」「これは太陽みたい」というように様々なイメージを加えながら作業する子どもたちの姿がみられた。また、文様を手がかりに破片の接合関係に気付く子どももあり、その発見は大きく心に響いたようで、その破片を握って離さない子どももいた。

この２つのケースでは、見て触って考えて分類するという作業により、土器に対する具体的な思考の芽生えを促すことができた。また目の前で土器片が分けられていく過程を体験し、最後に答合わせをすることによって達成感を得ることができる。さらにその分類の基準を身につけた目で再び完形土器を見ると、土器の厚さ薄さ、文様の付け方など、ただ見ているだけでは気付かなかった

土器の特徴に気付けるものの見方を併せて習得したことになる。

●土器片の拓本体験

小学６年生の授業において、30人程度の集団で実施。土器を焼成している間の授業において、地域の歴史の話の一環として、学校周辺遺跡の土器を見て触る等の体験とともに、土器片の拓本体験を実施した。拓本用としては学校周辺遺跡の土器片を用意し、遺跡がある場所のイメージもプラスさせながら作業を進めた。土器片を選ぶ段階でも文様をよく観察している様子が見られ、作業後には友達と拓本と見比べたりする姿が見られた。

このケースの子どもたちは６学年なので、すでに授業で縄文時代の勉強をしており、時代のイメージはできていたようであるが、自分たちが住む近くにも縄文時代の遺跡があるということを知り、その出土品に触れ、教科書で学んだ時代と実際とが結びついたようであった。

また、その土器文様をしおりにして持ち帰ることにより体験を形にし、家族などの身近な人々への話題提供にもつながると考えられる。

以上の例のように、出土品をよく見て理解してもらいたい場合には、上記のような作業を伴った体験を加えることで、子どもたちがより主体的に出土品に関わることができる。また同時に、破片資料を活かすこともできる。

（３）子どもの好奇心を活かしたアプローチ

これまでの出前授業の中では少数派である、学童クラブの中での実施例から気付いたことは、まず第一に子どもたちの好奇心の強さの違いである。普段は、学校教育での歴史の授業に関わる部分で実施しているため、小学校高学年の子どもたちを対象とすることがほとんどであるが、成長の発達段階もあり「そんなもの興味ないし」というような反応も多々見られるのも事実である。一方で低学年～中学年の子どもたちは、何事にも好奇心のかたまりのような存在であり、出土品を前に目を輝かせ、問いかけに対する反応も総じてよい。難しい歴史はまだ理解できなくても、自分たちが住んでいる場所には大昔にも人が住んでいて、その人たちが使っていた道具が目の前にあるという事実を知るという経験が、この何でも吸収しようとする段階の子どもたちにとっていかに有効なことであるかを感じる。自身が身をもって感じた体験は、きっと子ども自身が成長して歴史を学ぶようになった際には、何らかの形でよいサポーターとなってくれるはずである。

第二に学童クラブという授業枠にとらわれない時間で実施することで、内容の組み立ても自由になり、子どもたちが遊びの一環として歴史に触れるよいきっかけづくりになるということである。ゆとり教育が見直され、授業時間にもゆとりがなくなってきた昨今の状況を鑑みる

と、放課後で自由な時間が多い学童クラブにおいてこのような出前授業を設定することは、非常に有用であると思われる。しかしながら、小学生の学童クラブの管轄は教育委員会ではなく、子育て支援課などの福利厚生関連の所管になるため、教育面よりは保育面に重きがおかれており、出前授業実施に向けては、これまでとは異なったアプローチのルートが必要となる。実際、平成25年度に実施したケース1は学童クラブ保護者会の事業として、ケース2はNPO法人を介した活動として行なっており、今後は一般的な学童クラブ組織への働きかけによって実施するルートを開拓していく必要もある。

また実績を見ると、学校教育サイドでも、埋蔵文化財の出前授業は高学年になって歴史を学ぶようになってから…という意識があることは明らかであるが、興味好奇心の旺盛な低学年のうちに出土品を見せたり、様々な体験の機会を提供することの効果も高いと考えられることから、中学年や低学年の授業に対応できるような埋蔵文化財のアプローチ方法やその内容を考えていくことも有効であろう。

5 おわりに

平成12年度に発足し、14年目を迎えた資料普及課の活動のうち、今回は、平成20年度～25年度にかけての6年間に実施した出前授業の実績を中心に、埋蔵文化財の調査成果をどう生かし、どのように子どもたちに伝えていけるのかについて考えてみた。これまでは、歴史学習の一環として出前授業を届ける活動が主体であったが、子どもたちが考古資料に触れる機会というのは、考えてみると至る所にある。今後は教科の枠を超え、また学校教育の枠を超えた柔軟性のあるアプローチ方法を考えていく必要があると感じる。発掘調査によって得られる情報は、歴史のみを物語るのではなく、当時の生活や技術・文化・心など、まさに暮らしまごとの情報である。そう考えると活用できる分野の幅が広がるのではないだろうか。

私たちの足下に眠る遺跡は、まさに地域の歴史を語る生き証人である。そんな遺跡の出土品がもつ情報は、その近くに住む人たちにこそ伝えるべきである。学校の教科書には載っていない暮らしの実態を、出土品やさまざまな体験活動とともに伝えることで「遠い昔の歴史」から「地域の身近な歴史」として、子どもたちの心に少しでも残せたらと思う。

多くの出土品を収蔵庫から解放していかに関心をもち、いかに魅せるかは、普及活動の担当者にかかっているとも言える。私たちが発掘調査の過程で出会ったワクワクや「なるほど!」をそのまま、子どもたちに伝えたい。そんな心を根底において、これからも子どもたちの記憶に残るような新たな出前授業のあり方を模索していきたい。

〈参考文献〉

- 長島雄一 1998「考古資料をもっと身近なものにー博物館学芸員による「出前授業」の試みー」『考古学研究 第45巻第3号(通巻179号)』考古学研究会
- 岡村勝行・松田陽 2008「変革期の考古学者(1) 私たちはどこにいるか?」『考古学研究 第55巻第1号(通巻217号)』考古学研究会
- 國師洋之 2012「埋蔵文化財を活用した授業の展開」『研究紀要 縄文の森から 第5号』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 白井克尚 2013「社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かすー愛知県埋蔵文化財センターとの連携を通じてー」『探求 第24号』愛知教育大学社会科教育学会